批評・紹介

中國の家族と社會 I

オルガ・ラング 著
小川 修 訳

昭和二十八年四月 岩波書店
現代叢書版 二五四頁 二二〇圓

最近數年の間に中國社會に起った數々の變革の樣相は、中國よりの歸國者や、或は內・外の學者及びジャーナリスト達の手によって我々に知らされつゝある。それらの中で特に我々の注意を惹きつけるものゝ一つに、家とそれに附隨する樣々の人間關係の問題がある。それは我が國の民主化を阻んでいるものゝ根底に横わっている問題であり、中國に於ても、極く最近までその樣に考えられていたものであるからである。それは著者の言葉を借りれば「二〇世紀にはじまった中國民族の社會的・民族的解放の闘爭にとっては、かれらが家に對して献身的でありすぎたことが大きな障害」であったのである。現在我々は今一度、日本の「家」の現實の姿を顧みる必要に迫られているのであるが、その際一つの手掛となるのが、こゝに取上げたオルガ・ラングの「中國の家族と社會」で、この書は、障害となっていた時代の、この家族の問題を取り上げて、詳細なる調査と、それに加うるに廣い文献的知識を以てし、更にこれに對する社會的經濟的背景をも盛り込んで述べられたものである。

ラングはこの問題をどんな態度で取扱おうとしたか。それは次の三點に要約されうる。㈠家――中國の社會制度全体の中で最も代表的なものゝ一つである――を理解することにより、中國人の生活とそれをつくっている男女の態度の理解を助ける。㈡中國の家族を研究することにより、家族というものゝ一般の構造や機能などを理解し、また西洋社會に於いて家族生活の分裂がつくり出したところのきびしい諸問題を理解するのに役立たせる。㈢文化の變遷の過程を研究するための場として扱う。併し私は㈠及び㈢の點に於いて、特に㈠の點から見た場合のこの書を、高く評價したい。㈡の點については、現在我々は家族の分裂以前の段階に在って、之に苦しみ之を解決しょうとしているのであって、家族の分裂した歐米の人々が持っている問題と自然に異ってくるから、㈡の點については、一應評價の外においておくことにする。

さて本書を特に第一の點で高く評價する所以は、概して過去の、中國の家の問題を扱ったものが、兎もすれば抽象的な、家族構造論的な、靜的な傾向に陷ってしまって、人間生活の場としての家の觀點より捉えられることが少なかったのに對し、本書ではこれが、具体的な生き生きとした姿で描き出されているからである。それはラングが、古い權威を倒さんとする力と、それを守らんとする力とが對立していた、當時の中國の社會の中で苦惱する人達を、その日常生活・戀愛・結婚といった身近な問題から捉えて記しているからであり、それは一に、家を通して中國人を理解しようとした態度「政治生活と家族生活の民主化のために闘いつゝある中國の新しい世代に對する私の同情的な態度」によると考えるからである。

こゝで本書の成り立ちを見てみると、この書はラングが一九三五年から三七年にかけて、ウイットフォーゲル博士の指導の下に、太平洋問題調査會とコロンビア大學の協同主催で行われた中國社會實

態調査に參加し、之により得た資料を基礎にして記したものである。而してその資料は「北京協和醫學附屬病院の社會事業部による約四〇〇〇の記錄からとった患者記錄と統計資料、北京・天津・上海・無錫・福建などで階級別、年齡別に行なった面接調査、華北・華南・華中における一〇都市の一二大學と八高校の學生から回答をとった一七〇〇件の書面調査、福建と廣東における二六の同族について行なった生活調査であり、その地域的範圍は、ソビエット地區を除いて（之は非常に殘念なことであるが）略ゝ中國全土に亘り、その社會的範圍は、「各社會層を典型的に代表する對象をつかみえた」と考えて妥當な樣である。この樣に、調査が廣範に亘っていることも本書の價値を高める一つの理由であるが、更にこの調査が一九三五年から三七年にかけて、即ち現代中國史上の一つのエポックを畫す時期—西安事件、一二・九學生運動、蘆溝橋事件といった諸事件が續發した時期になされたことは、更に興味あることである。斯の如く時間的にも注目に値する際に、豊富な資料を扱って書かれている所に、本書の人に迫って來る所以があるのであるが、その資料の取扱い方その他に、若干の疑問が見られないわけでもない。

本書は「昔の中國の家族」と「現代の中國の家族」の二部から成り立っている。「昔の中國の家族」については、ラングは次の如く言っている。「今なおいたるところに見出される古いもの、家族關係においては、かなりひどく動搖しているとはいえ、いまでもやはり無視しえない現實をなしている。『儒教型』を説明するために、序論的に書かれたものである。」と。

元來社會學者であるラングが、序論的に書いたものに或はこれ以上を望むことは無理なことであるかも知れないが、この第一部には多少の問題がある。先ずラングは第一章『國家と社會』で「中國は、紀元前三世紀の中頃秦の始皇の時に、封建時代がおわりをつげて帝政時代がはじまった」とし、この帝政中國の成立を、灌漑と水害豫防の爲の土木事業に求めている。而して更に帝政中國には幾多の王朝の交代はあったが、「基本的な社會構造はすっかり弱まってはいても、政治・社會制度やイデオロジーには二一世紀もの長い間何の變化もせず、中國社會はいつも停滯していた。而してようやく現在になってしぶしぶながら新しい傾向に道をゆずりかけているという狀態なのである。」と師であり、又夫でもあったウィットフォーゲル張りの停滯論を提出して、その停滯性の中には、何等新時代への芽がなかったとのべている。こゝに示されたラングの論が、首肯し難いことはこゝに述べるまでもないことであろうから、こゝではこの點を指摘するに止めておくが、「昔の中國の家族」が、このような社會的基盤から出てくる「儒教型」としてのみ考えられている所に、更に問題がある。

次にラングは、第二章『家族の機能と構造』において、中國の家族が決して今迄考えられたような大家族でないこと、又「家族共產制」といった概念も否定さるべきであるといった秀れた見解を述べているが、ラングがこゝで繰り展げた家族の型の分類、これは第二部「現代中國の家族」とも大いに關聯を持つ事柄であるが、この分類には猶非常な疑問がある。一言にして言うならば、量的な差異に目を向けすぎて、質的なそれへの關心が不足しているように思われるのである。ラングは言っている。「家族の構成はまたきわめて多樣であるが、小家族と中家族と二種類の大家族とが主要な三つの型である。小家族はまた生物學的家族・自然家族・核家族あるいは小

家庭とも呼ばれ、夫と妻と子供によって構成される。……中家族は兩親とその未婚の子供たち及び一人の既婚の息子とその妻子から成る。……大家族は兩親・その未婚の子供、その既婚の息子たちと、息子たちの妻子によって構成される。」

果して斯の如き基準で、中國の家族を三つの型に分類して、中國の家族の問題が、精確に摑みうるであろうか。勿論量的な分類も一つの便法ではあろう。又、こゝには「昔の中國社會では、何よりまず社會・經濟的要因が家族型を規整する力であった。」と社會的經濟的要因を考えてはいる樣ではあるが、それだけに又出生・死亡・婚姻、特に後者によって變化し易い家族の成員に、固執するのはうなずけない。小家族なるが故に近代的家族であると言えるだろうか。ラング自身が言っている如く、「理想を大家族に持ちながら貧困の故に大家族を構成しなかった」からといって、その小家族が近代的家族と同質と考えてよいのだろうか。私はこの點、大いに疑問を感ぜざるをえない。むしろ家族間の種々の關係等をも考察して分類されるべきではなかったろうか。なお第一部には資料の選び方、扱い方、その他に若干の疑問や不滿がないわけでもないが、こゝでは割愛することにする。第二部は「現代の中國の家族」と題され、これこそこの書の本論に當り、こゝでラングは、その豊富な材料を驅使して、議論をすゝめている。第二部を通じて見た所、資料の整理にやゝ難點があり、まとまりを缺く箇所が若干見受けられる。併し第二部はその樣な不滿を越えて、何度も繰り返すようであるが、現實の生きた姿を取り上げているということが、高く評價さるべきである。而してこの中で最も私の興味を惹いたのは、結婚とネポティズムである。この兩者こそ特に人々に「家」という意識を再認識させ、重苦しい感じを起させる言葉であるからである。「親は慣習を楯にとってたやすくはその權威をゆずらなかったし、自己の權利を堂々と主張する勇氣をもつ子供はめったにはないのだ。ことに農村では若い男女が自分で配偶者を選ぶということは絶對に不可能である。」「弟に職を與えなければ親戚たちがうるさいので。」「理論的には、その仕事にもっとも適した志望者を採用すべきだ。だが、自分は利己的な人間だから自分の兄弟を選ぶ。」「それはよくないことだ、だが、自分の家族感情はそうせずにはいられない。」と言ったラングの意見や、ラングの質問に答えた言葉の中に、現在の日本の狀態と考えあわして、深く考えさせられるものがある。

最後に、勿論この書は所謂最近流行の見聞記とかいった種類のものではなく、立派な專門書である。最初に述べた著者の三つの目的は、夫々成功を納め、而して若輩の筆者の見逃している多くの秀れた成果が含まれているであろう。併し筆者は、この書をそういった專門的な觀點とは別に、民主化の道を、やゝもすれば後へ引き戻されようとしながら、歩み續けている現實の立場から、見てもよいように思って拙文を草した次第である。

（狩野　直禎）